

II. 住民参加型災害復興支援に関する能力強化研修（国内）

1. プログラム

Day, Date & Time	Activity
Day 1 2005.10.28	
9:45-10:30	開会 自己紹介、プログラムの紹介
10:00-11:30	Session1: Disasters - Hot spots in Asia
11:45-13:00	Session2: Why things happen - Social Analysis of Southeast Asia
14:00-15:45	Session3: Framework in Response to Asia
16:00-17:30	Session4: Emergency Response – Key Factors to Focus on
Day 2 2005.10.29	
10:00-11:15	Session5: Rehabilitation and Reconstruction Process
11:30-13:00	Session6: Transformation
14:00-15:45	Session7: Conflict Situation - Understanding Conflict – stages, factors and actors
16:00-17:30	Session8: Human Rights Elements in Disaster Management
Day 3 2005.10.30	
10:00-11:30	Session9: Community Organizing Process
11:45-13:00	Session10: Critical Awareness
14:00-15:45	Session11: Local Leadership Development
16:00-17:15	Session12: Popular Communication as Educational Tool
17:14-17:30	閉会

(意見交換)

・「この地図を見てどう思うか？」

—非常にたくさんの災害、紛争が起きている。

—とても多いので、対応しきれない。優先順位をつけないといけない。

—被害がたくさんありとても悲しく感じる。

—きっと私たちが覚えていないものが、もっとあるのではないか？

(講師のコメント): 小さいものを含めると、インドネシアだけでも 10 箇所以上は紛争地域がある。

・「誰がもっとも影響を受けるか？」

—弱い人々

—同じ地域で起きた災害でも、亡くなる人と生残る人がいる

—場所に関わらず広い範囲で災害は起こるが、被害は一律ではなく、防ぐことができる場合もある

—途上国のほうが死者が多い

—それは「人災」とも言えるのではないか

(講師のコメント): 南北朝鮮、日露など、国境紛争が出なかった。表面的には現在は大した影響を与えていないように見えるが、潜在的に大きな紛争が存在するとも言えるのでは。

講師の
コメント

この後特に東南アジアに絞って、何が、なぜ、起こっているのかを分析する。紛争と災害について見ていくが、原理はどちらも似ているといえる。そこを分析してみる。

(西 あい)

3) Session2: Why things happen -Social Analysis of Southeast Asia

目的 紛争・自然災害の背景にある社会分析

プロセス 1) A)紛争の起こる背景、B)自然災害の被害が拡大する背景について、参加者が2グループに分かれディスカッション。
2) 紛争・自然災害発生時に見えやすい/見えにくい問題について全体でブレイン・ストーミング。

内容 1) 紛争・自然災害時の当事者・関係者/要因/状況・背景分析
A)紛争：なぜ起きるのか。B)自然災害：災害の被害が拡大するのはなぜか。
当事者・関係者(Actors)、要因(Factors)、状況・背景分析(Situation / Analysis)ー状況を好転/悪化させるもの双方について、これら3つの要素がどのように関連しているか特に留意しながら、具体的な事例を交えながら話し合う。

A)紛争

- 当事者・関係者(Actors)
政府、反政府(武装)勢力、政府軍、警察、地域/宗教/エスニック・グループ、企業、近隣国、大国
援助機関(緊急/開発/政策提言・仲介)、国際社会、メディア等
- 要因(Factors)・・・何を巡っての争いか
政府の権力、政策、土地、貧困、資源、アイデンティティ(歴史背景/エスニシティ/宗教)、教育、ビジネス等
- 状況・背景分析(Situation / Analysis)
政府の統治能力(強/弱)、民衆の力(強/弱)、開発の格差、分離・独立運動、差別、メディア統制、国際政治、無知



参加者のコメントなど：フィリピン・ミンダナオ、インドネシア・アチェの独立紛争の事例ー植民地支配を受ける以前に強い王国が存在したという歴史的背景や、豊富な天然資源を巡る政府や多国籍企業の思惑、もともとはイスラム教徒とキリスト教徒が共存していたにも関わらず、政策やメディアの影響により宗教紛争に仕立て上

げられる等。

B)自然災害の被害拡大

- 当事者・関係者(Actors)
被災者(直接/間接/国民/外国人)、政府、外国政府、企業、国連(本部/現地)、NGO(国際/現地)、Community Organizing ボランティア、メディア
- 要因(Factors)
アクセス(水/食料/生活必需品/医療/輸送手段/通信設備/衛生設備/

被災後の就学等)、住居(非耐震/耐水)、政策、コミュニティの離散、失業、気象条件、防災に関する教育欠如、資金不足、調整不足、トラウマ、民族の多様性、災害以前からの問題(紛争/貧困/ジェンダー)等

- 状況・背景分析(Situation / Analysis)

不安定さ、依存、鬱(⇒アルコール依存/ドメスティック・バイオレンス)、人身売買、メディアによる偏った報道、長期計画の不明確さ、政策(移民に対する不公平な措置等)

参加者のコメントなど：スマトラ島沖地震・津波災害の事例一貧困地域が被災地と重なった、援助機関間の調整不足、政府の不明確な政策(例：海岸から 100 米あるいは 200 米以内における建物建設を禁止するバッファゾーン政策)等により支援活動に支障をきたし、被害拡大につながっている。

2) 紛争・自然災害発生時に見えやすい/見えにくい問題

紛争・災害時にメディアでよく目にする光景

- センセーショナルな光景(銃撃戦、泣き叫ぶ人々、破壊の凄まじさ等)
- 大国が競い合って支援を表明する様子
- セレブリティを動員し支援を呼びかける国連機関等

紛争が起こる、あるいは災害の被害が拡大する原因

- 政治的な意思
- 資源管理
- アイデンティティ等

政治・経済・社会・文化的背景に関する事柄は、前半のディスカッションであげられた要因(Factors)とほぼ対応する。

講師の
コメント

前者は目に見える問題であるのに対し、後者は表面化しにくいが根本的な問題・原因である。紛争・災害時の中心課題は、生存、基本的ニーズ、教育、和平等であり、これらの分野において援助機関は支援を実施することになる。紛争・災害時、上記3つのポイント(当事者・関係者/要因/状況・背景)の相関関係を的確に分析することが重要であり、援助機関は、表面化しにくい根本的な問題・原因を念頭に置き支援に取り組むことが重要である。また、特にNGOの場合は、当事者・関係者間の力関係が適切に変化することを促すためにも、対象者が参加した支援の実施が欠かせない。



(鈴木幸子)

4) Session3: Framework in Response to Asia

目的 紛争・自然災害の被害に対し、アプローチと方法を理解する。

プロセス どのようなアプローチが必要か、取るべき方法について方法について分析する。さらに、そのアプローチを実行した場合の問題点や利点を分析する。

内容 *セッション開始前のアイスブレイキング：

「民衆>政府>軍隊>民衆>・・・」のじゃんけんを2グループに分かれて行う。全員で「軍隊」、「政府」、「民衆」を表現するポーズを決める。グループごとにどのポーズを出すか決め、合図で列で向かい合ってポーズする。

1) インドネシア・アチェの女性アイシャの生活（ドキュメンタリーDVD）

→1998年アイシャは紛争で夫を亡くした。

→商店を立ち上げ、復興の過程を経ていた。

→2005年津波が発生し、商店などの財産が全て失われた・・・など。

2) 紛争・自然災害後の支援として、何が考えられるか。さらにテーマに分類。

・基礎的な物資支援、精神的なサポートなど・・・Welfare approach

・情報収集、アセスメントなど・・・Development aid approach

・生計回復、中長期復興計画など・・・Community based approach/Rights based approach



3) Rights based approach の重要性。

→人権の獲得こそ開発の目的である。

→“PANEL” analysis の説明など。

Rights-Based Assessment & Analysis: Root Causes



4) 各アプローチの強みと弱み

- Welfare approach・・・
弱：依存を招く、持続性なし。強：迅速、緊急的な効果。
- Development aid approach・・・
弱：政府・NGO 間の協力なし。強：適切な支援を考慮できる
- Community based approach・・・
弱：同じ支援モデルが通用しない(地域差)。強：持続性。
- Rights based approach・・・
弱：政府の圧力。強：公平性など。

講師の コメント

紛争・自然災害後の支援アプローチにはどのような内容があり、その活動に関する弱点、利点となるのかを認識した上で、組み立てていく。また、どのアプローチにも人権の視野を取り入れること(または実際に取り組んでいくこと)が大切である。支援する側にも限界があるが、その限界をいかになくしていくかが重要。今後、セミナー参加者がその限界をいかに明確に認識し、いかに立ち向かい、いかにシェアしていくかが課題となっていく。

(堤 由貴)

5) Session4: Emergency response – Key factors to focus on

- 目的 緊急時に、異なるアクターがどのようなアプローチで支援活動を行うべきか学ぶ。
- プロセス 緊急時の架空のニュースに基づき、A) JICA、B) 国際 NGO(CARE International)、C) 現地 NGO の3つのグループに分かれて、それぞれのアクターが災害への緊急支援として、どういったアプローチをとるべきかを話し合い、グループごとに発表する。
- 内容 1) 架空のニュース速報

Breaking News:

Major Disaster as Meteor Hits The Earth

Bangkok, Friday, The inevitable took the world by storm, only this time one that is caused by an inter-galactic storm. A meteor the size of a football field hit the capital city during the prime time morning rush hour in this Mekong kingdom of Thailand.

At 8.35 am the crowds wading through the busy traffic of Sukhumvit, was shocked and totally unprepared for this natural phenomenon that has never ever happened before, in recent history.

The meteor measuring the size of a football field hit the business centre of Bangkok business district, in a ball of fire and destroyed rows on building and school and killing thousands of people.

The devastation has destroyed major power lines and infrastructure and claimed thousands on lives. The meteor hit the heart of the city where 3 sky-scrappers are located. By estimation alone the collapsed building would house about 8000 workers as office hours start about 8.30am to 9am in this business area. There is no official figures just yet but estimates claim that it could go up to 50,000 lives lost and half a million injured.

Just coming a year after the Tsunami, this disaster has shocked the nation and has invited an outpouring of sympathy and assistance from the whole world.

At this moment people are rushing against time to save anyone trapped in the rubble and the danger that more building may collapse soon as the fires from the meteor is still burning wildly.

There is also fear of radioactive rays that may be emitted by the remnants of this inter-galactic material that is now sitting in the heart of Bangkok. Reuters.

結果：

A) JICA

- ・ ファンドの確保
- ・ 更なる情報の収集(在タイ日本大使館経由)
- ・ 緊急対応チームの設置
- ・ シェルターの建設
- ・ ライフラインの確保
- ・ 公共施設の再建

B) 国際 NGO(Care International)

- ・ 情報収集
- ・ 現地事務所との連絡
- ・ 救援人員の派遣
- ・ 現地での調整

- ・ 被害状況の把握
- ・ 水、食料等生活に最低限必要な物資の支給
- ・ 本部にてプレスリリースの発表
- ・ 本部にて寄付、募金等資金調達活動

C) 現地 NGO

- ・ スタッフの安全確認
- ・ 情報収集
- ・ 他の人々と協力
- ・ 被害状況の把握
- ・ 現地住民への情報提供
- ・ 外部との現地状況の共有
- ・ 水、食料等生活に最低限必要な物資の支給
- ・ 緊急事業の計画立案

講師の
コメント

・スムーズな緊急対応のためには、それぞれ異なる役割を担うアクター間での調整が肝要。

・外から被災現場に送られる人々は、事前にある程度の現地についての知識を持っていなければならない(その土地の文化、社会、システムなど)

・被災者を緊急対応への重要なアクターとして取り込むこと(現地のシステムの中で、被災者が積極的に支援に関わっていただけるような枠組み作りを支援する)。この視点は緊急時においては往々にして忘れられがちである。そのためにも、緊急時には被災地域に実際に足を運び、被災者の話をきき、彼らの積極的な参加を促すことが大切。彼ら自身が力をつけることが、被害から立ち直るための一種の **healing process** ともなる。

・他に、特に緊急支援のアプローチとして大切なポイントは以下の通り。

- ・ コミュニケーション(内部→外部といった一方向ではなく、双方向のもの)
- ・ 情報収集
- ・ 調整(コーディネーション)(他の現地 NGO や機関との連携が必要)
- ・ 状況の把握
- ・ 人的、物的リソースの確保
- ・ 迅速な対応
- ・ 生活に最低限必要なニーズへの対応
- ・ 異なるグループへのアドボカシー
- ・ リソースの効果的な活用(人材、ボランティア、集まった寄付金など)

(田仲 愛)

6) Session5: Rehabilitation and Reconstruction Process

目的 Session4 のアプローチについて、如何なるリハビリテーションの過程で適応可能であるか検討し、それを復興現場で応用させる方法を学ぶ。

プロセス 前日のワークショップの振り返りと理解増進を行った後、アチェの PEKKA 事業地事例（ビデオ）をもとにディスカッション。

内容 1) アイスブレイキング

グループの中で数名ボールを蹴って人に当てる人を決める。他の人はボールに当たらないように逃げる。一度ボールに当たった人は座って、ボールが手元に来たら逃げる人に当てる側になる。残り数名になった所で終わり。ボール 2 個使用。



2) アチェの事例（ジェンダー問題と父系制の社会の中で）

津波から 4 ヶ月後、PEKKA 事業対象地では、9 人の女性たちが、6×7m の常設住宅を建設。大工や建設財も、NGO ではなく施主である女性たちが選択して主体的に実施する。今後 100 ヶ村にて実施予定。何故、女性たちがこうした活動を行うことが可能であるのか。女性の参加やリーダーシップを促す支援を行っていること。またその背景には、未亡人が社会的に尊ばれる文化背景であることもある。

3) What principles are used in the rehabilitation process?

基本的理解として、もともと住民参加に熱心でない地域では活動が難しい。住民参加を促すために長期に渡って同一地域にコミット、住み込むことなどが必要である。

加えて、資金規模の小さい NGO が、住民参加について該当地域の対象者と話し合いを行っても必ずしも上手くいくケースばかりではない。また、外からの多くの支援が入る時期においては、他の大きな NGO や UN 機関が後から支援に来ることが予め把握され、手間のかかる住民参加に関心を示さないケースもある。

7) Session6: Transformation

目的 緊急時から復興時の支援に移り変わる際の留意点を知り、住民のための本当の意味での支援と住民参加型支援の意味について学ぶ。

プロセス

- 1) 緊急・復興支援時に残される問題、変化について、課題を地雷(land mine)にたとえ、支援後に残される land mine を参加者が提起する。全体ディスカッションで考察を行う。
- 2) グループに分かれ、様々な「力」の関係を身体で表現する。パワー（「力」、「権力」）について考える。
- 3) 2つのグループに分かれ、緊急時に男女それぞれ必要なことをディスカッションし、ジェンダーについて考える。

内容 1) 緊急・復興支援による地雷は？

- ・ ゴミ(シェルター、仮説住居、器材なども含む)
- ・ 外部主導の文化、宗教が持ち込まれる
- ・ 精神構造の変化—依存心の高まり、傲慢さの具現化
- ・ 経済的、社会的影響—援助経済、価格高騰、浪費(消費指向の高まり)、汚職への連鎖
- ・ 社会的モラル・健康的影響—セックス産業、エイズ(HIV)問題などの広がり
- ・ 支援機材・物資に対してのメンテナンス問題
- ・ 決定権など本来地元へ帰属すべき権限が外部に委譲され、今まであった独自の決定プロセスに変化が生じる

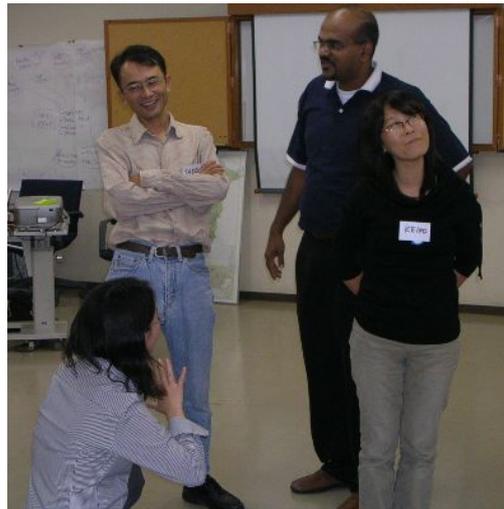


2) 「力」の関係、力とは何か。

- ・ ステイタス—お金を持っている、尊敬されているなどステイタスがあがる
- ・ 信頼関係からでてくるもの
- ・ 武力
- ・ ポジションとして既に存在する「力」・・・国連・大統領
- ・ 知識力

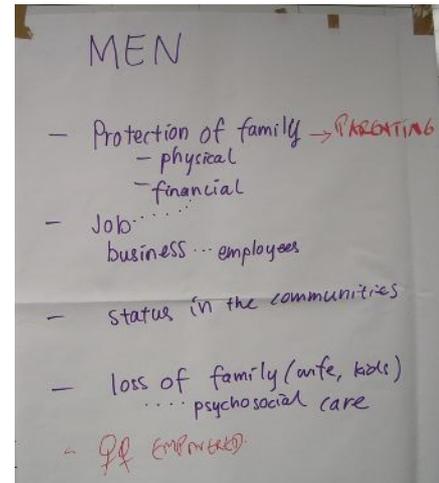
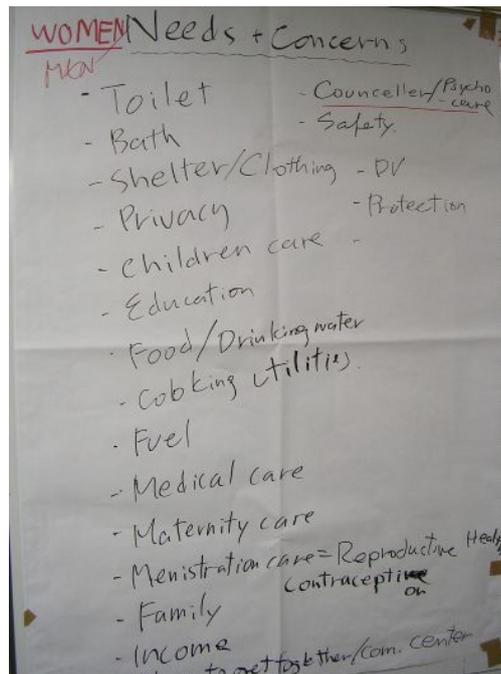
人々・グループの力

様々な「力」関係



- 3) 「ジェンダー」ー災害が起きた時の「ニーズ」と「懸案事項」、思考傾向の差異。
- ・ 女性のニーズでは内的な心配、要求、生活に必要なものなど具体的なものをあげてくることが多いのに対し、男性は公共的、社会的な要望を意見としてあげてくる。
 - ・ 心のケアー女性が弱いという思い込みがある。一方、男性は強いふりをして、なかなか弱い部分を表現せず、後回しにされる傾向があり、症状が把握できた場合にかなり深刻な場合も見受けられる。男性も女性と同じように心傷つき、トラウ

マを抱えることを忘れず接していくことが必要。



講師の
コメント

- 「地雷」－支援の一側面として問題が残される場合があることを考慮しながら支援をしていく必要がある。
- 「力」－支援していく中で、新たに生じる力関係もあるし、どのような「力」があるのか把握する。ステイタスの変化や力関係の変化に着目し、住民参加型の目的を捉える。
- 「ジェンダー」－男女間で思考の違いがあるため、常にその違いを認識しながらそれぞれのグループと話あいを進めながら意見をくみ上げていくことが大切である。男女間の思考傾向、感情傾向などを分析する。片方だけの話合いを基に事を進めると誤った結論に至る場合もあるので、必ず両サイドに話をしながら方向性を見極めていく必要がある。

(後藤明子)

8) Session 7: Conflict Situation - Understanding Conflict –Stages, Factors and Actors

目的 紛争とは何かを理解する

プロセス 1)どのように紛争は始まるか
と内容 ---風船割ゲーム

ルール：風船と画鋸を持つ。「自分の風船を守りなさい」という指示の後、スタート。皆、スタートの合図と共に人の風船を割り始める。残り二人になったところで終わり。

講師：「ゲームの中で自分がどのように感じたか。」

参加者：怖い、恐ろしい、驚いた、疲れた、自分の風船を失いたくなかった・・・

講師：「なぜ他人の風船を割ったのか」

参加者：そうしなければいけないと思ったから、他人のまねをして、復讐、風船がそこにあったから、武器を持っていたから、

(しかし「他の人の風船を割れ」という指示はなかった)

講師：「ゲームの中で一番悪いのは誰だったか」

参加者：参加者にピンを与えたファシリテーター

参加者は武器を持っていると使う傾向にあるということに気づき、風船ゲームは紛争がはじまるプロセスと類似していることを理解する。



2)紛争のプロセス

- ① 材料集め
- ② 開戦
- ③ 紛争

この状況下で私たちはなにをすべきか

- ・情報収集
- ・病院建設
- ・メディアリリース
- ・公正な情報を広める

- ・暴力をやめさせる
- ・安全の確保
- ・難民への支援
- ・中立であること
- ④ 闘争→黄色信号
- ⑤ 長期間の平和

講師のコメント 和解とは、許すこと、忘れること。和解のプロセスに決まった体裁はなく、その地域の状況、紛争の背景にあわせた和解方法を見つけなければいけない。

(吉川響子)

9) Session8: Human Rights Elements in Disaster Management

目的 緊急支援をおこなう場合、緊急支援事業をおこなう際に気をつけなければならない、人権など忘れがちな要素を挙げる。

プロセスと内容 1) 参加者が一列に並び、身長や肌の色などによって、順番に並んでもらう。最後に Ethnic Group に焦点をおき、順番にしてもらう(日本の場合、在日韓国人、アイヌ族、部落、沖縄、などなど)。



ディスカッションの要点：

- 緊急時は、迅速的な支援をおこなわなければならないため、人権や権利などの要素を事業に組み込むことを忘れがちである。人権の要素は、緊急支援をおこなう場合に覚えておかなければならないことであり、新しい場所で事業を行う場合には、とても重要なポイントとなる。
- 緊急支援事業をおこなうにあたって、覚えておかなければならないこと
 - ・ 尊厳ある生活の権利：支援活動をしていく上で、いつも自分に問いかけなければならない点。
 - ・ 最低基準を満たした生活の権利
 - ・ 人間の安全保障の権利

- ・家庭・家族の安全保障の権利
- ・環境保全と持続性
- ・自分自身の意思決定権：政党を選択する権利など。
- ・平等性、差別の無い環境、偏りのない支援
- ・ジェンダーの平等性
- これらの権利は、事業を立案する際に組み込まれていなければならない。
- 事業執行の基準
 - ・情報の提供・共有
 - ・参加型事業
 - ・調査
 - ・目標に対しての対応
 - ・モニタリングと事業監督
 - ・説明・実施義務：一方通行ではなく、お互いに情報交換などをおこなう必要性がある

**講師の
コメント**

どのような支援事業をおこなう場合でも、人権や権利に関することは常に頭に入れておかなければならない。特に住民参加型の事業をおこなう場合は、人権や権利などといった、いわば「当たり前」のことがとても重要となる。しかし、緊急支援事業をおこなう場合、時間に限りがあるため、これらのことが忘れがちになってしまう。これらのことを忘れないためにも、事業立案の時点から人権や権利などの要素に気を配り、事業をおこなっていく際にも常に自分たちに問いかける必要がある。

(鈴木泰生)

10) Session9: Community Organizing Process

目的 コミュニティ組織を理解する

プロセス 1)信頼を理解するゲーム

と内容

- ① 参加者が2グループに分かれ、2列の直線に並び、ペアを作る。片側の列の人が後ろ向きに倒れるのを、もう片側の列の相方が受け止める。最初は双方の列の距離は1歩分。これは難なくできる。次に受け手が1歩下がる。倒れる方は若干の不安を感じる。さらに受け手が1歩下がる。倒れてから受け止められるまでの時間が増す分、不安感も増大する。



- ② 2つのグループ(各7人)が同時に模造紙の上に乗る。最初は難なくできる。次に模造紙を半分に折り、同様に全員が乗る。互いにかなり寄り合わなければならなくなるが、これもできる。さらに半分に折ると、皆片足でなければ乗れなくなる。そしてもう半分に折ると極めて難しくなる。一方のグループしか成功できなかった。



結果：

①のゲームでは、「信頼(Trust)」の重要性である。後ろに倒れるという不安な行為ができるのは、受け止める相手を信頼しているからに他ならない。すなわち、信頼がなければ不安を感じる人々は行動を起こせない。Community Organizing (CO)では何よりも互いの信頼を築くことが重要であることが実感的に認識できた。更に、紛争地域では信頼醸成が大切である。

②のゲームでは、一見不可能に思えることでもメンバーが互いに協力(Cooperation)することで実現可能になることが体験でき、ここからコミュニティ構成員の協力を強めることの大切さについて理解できる。

2) 問題解決のためのコミュニティの取り組み方法を理解するゲーム

講師が参加者全員にそれぞれが行うべきことが記された紙を配る。参加者は他人に見せず無言で指示通り動く。指示は〈All must sit by the projector screen〉〈All must sit by the dividing board〉〈All must sit by the back door〉の3通りであった。

その結果、まず、各人がメモに書かれた場所に従って会場の前方のスクリーン、中央の仕切り版、後方の扉、の3ヶ所に分かれた。しかし、指示は〈All must〜〉であることに気づき、自分だけが指定の場所にいるのでは十分ではないと、自分の方に他のグループを連れてこようとする動きの攻防となった。やがて、全員が等しく要件を満たす、部屋の真ん中あたりで、スクリーン、仕切り版、扉、いずれからも等距離にある場を選び、皆そのあたりに固まることとなって落ち着いた。



結果：

ゲームの結果は厳密に指示に従ったものではなかった。しかしそれは参加者(=コミュニティ)の話し合いによる指示の再解釈により捻出された解決策であった。全員の利得を完全に満足させる解決が困難な場合、妥協することも必要となる。外部者が主導となるのではなく、また、内部のものでもわかり易い指導と共に、あくまで話し合いと説得によりコミュニティの内部からその妥協策を導き出すことが、重要である体験的比喩である。

現実のコミュニティでは人々の考えを動かすことは大変に長い時間のかかるプロセスである。コミュニティにはそれぞれのアイデンティティがあり、歴史や文化を背

負っている。そうした集団の考え、行動を変えていくことは容易なことではない。

講師の
コメント

COにおける重要ないくつかの原則が示された。COには固定した定義といったものは存在しないが、これに携わるためにはしっかりと念頭においておくべき**原則**がある。以下はその主なものである。

- ① コミュニティと外部支援者との間の信頼関係
- ② 全コミュニティ構成員の協力
- ③ コミュニティ構成員の中での妥協と再解釈
- ④ コミュニティ構成員の間に共通して求められる目標の達成
- ⑤ 説得
- ⑥ 異なる考えの整理
- ⑦ 折衝
- ⑧ 一致した合意のための議論
- ⑨ 問題解決のための創造的な方策
- ⑩ 他人の置かれた状況に対する感性
- ⑪ 集団的なオーナーシップ

COの原則が参加者からも提示された。

- ⑫ 両勝利〈win-win〉での解決
- ⑬ コミュニティの側に立った視点と行動

*NGOとして時にドナーの意向に押されることがあるが、現場で働く者はその立脚点を相手コミュニティに置き、巧妙に働く〈be strategic〉と共に、ドナーを啓発することが肝要。

COを実践するにはコミュニティの中に身をおき、人々と共に暮らす中で信頼、尊敬を得ていくことが必要である。そのためには、態度、振る舞いが大きな意味をもつ。まず、外部者であるNGO職員がコミュニティの人々から信頼され、次にコミュニティの構成員それぞれの間に信頼感を育てていかなければならない。信頼醸成は復興支援の第1段階で極めて重要である。また、信頼醸成は平常時の方が容易というものではなく、災害が発生した後の復興援助という場面でも確実に可能であるし、不可欠である。

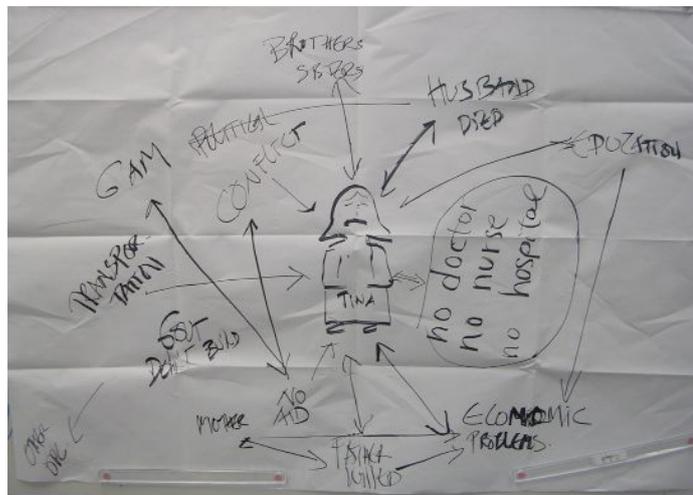
(小山直行)

1 1) Session10: Critical Awareness

目的 住民参加型の復興支援において、クリティカルアウェアネスをどのように深めていくのか学ぶ。

プロセスと内容 アチェの女性の事例ストーリーを読み、問題の原因と何ができるのかについて、ディスカッションを行う。

主人公ティナはインドネシア・アチェに住む若い女性である。彼女は9歳の時に紛争によって父を亡くし、3人の兄弟と母親と共に貧しい生活を送っていた。津波の数ヶ月前ティナは母親の勧めでムサという男性と結婚した。ムサは月に一回家に帰り、彼女に食料と少しのお金を与えた。津波がきたときティナは妊娠中だった。彼女とその家族は逃げられたが、家は流れた。彼らはIDPのテントに他の多くの人々と共に滞在した。公道からは遠いところにある村でアチェ解放運動のエリアであった。人々はそこに近づくことを恐れたので救援物資は届かなかった。ある日、ティナの夫が軍によって射殺された。彼女は彼女とその子供を養うだけの栄養が無かったので、お産が難しくなった。病院も診療所も近くなく、交通機関も無かった。そしてお産をせずに死んでしまった。



- ① ティナの死は複数の理由が織り交ざっている。大切なことは、理由と考えられることを人々が理解するよう(できるよう)、ファシリテートすることである。
- ② 政府はティナの住む地域に関心がない。従って、NGOがそれぞれ得意とする分野を担当できるようなコーディネーションが不可欠である。
- ③ NGOはそれぞれどのように貢献できるか？
 - (ア) 政府やGAMに情報提供をする
 - (イ) 人々に自分たちの考えを押し付けることはできない。人々が自分たちで例えば教育が必要だと感じることが大切である。
 - (ウ) 病院が近くでないこのような地域の場合、ミッドワイフ(経験を持つ主婦)をトレーニングする事で状況を改善できる可能性もある。

- (エ) 誰がこの村を変えることができるのか？→住民たちである。NGO などはそのためのファシリテーターに過ぎない。
- (オ) ファシリテートするためのキーファクターとは？
- ① 彼らに考えさせること
 - ② 彼らに何を变えたいのかを問うこと
- 以上により、彼ら(住民)にクリティカルアウェアネスを意識させる。

講師の
コメント

Critical awareness の柱となるもの：

- ① Vision perspective building (critical analysis)
→文化や慣習により、コミュニケーションの仕方が、個人主義である地域もある。しかし、参加することなしにはなにも進まない事を説明することが大切である。人々が参加したいと思えるような仕組み作りも必要である。
- ② Build capacity of community (capacity building)
→マネージングスキルや教育など実践的なこと
- ③ Networking operational building
- ④ Advocacy
→法律を変えるための働きかけや価値観を変える事も時には必要である
→例ーインドネシアは世界銀行への負債があるために、私立の病院を作ることが難しい。

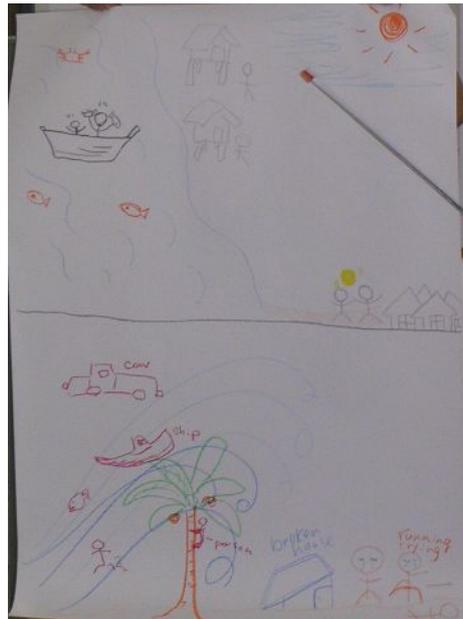
(山岡佳織)

1 2) Session11: Local Leadership Development

目的 リーダーに求められるものとは何か理解する。

プロセス 参加者を、3名のリーダーのもとグループに分け、各グループでスマトラ沖地震による津波のイメージを1枚の模造紙に描く。

1) 絵を描き終えた絵の説明。



グループ A: 津波前、津波後の様子。



グループ B: 大きな津波に様々なものが飲み込まれ、山に逃げる人々の姿。

グループ C: 津波が去った後の海岸、町の様子。



2) どのような手順で各グループが絵を描き挙げたのか。

グループ A: グループ全員で何をどのように描くか話しあいながら、全員で描き始めた。

グループ B: 最初にリーダーが大きな津波の絵を描き、それを見ていたメンバーが各々津波のイメージを書き加えた。

グループ C: 最初にリーダーが津波のイメージを出し合うことを提案し、そのイメージをリストアップした。その後何をどのように描いていくか話し合い絵に取り掛かった。

3) 各グループのリーダーに対する評価

グループ A のリーダー: (無関心タイプ)

リーダーは主張や行動を起こさなかったため、メンバーはリーダーが誰なのか認識していなかった。

グループ B のリーダー: (ワンマンタイプ)

リーダーがまず波を描き、メンバーが付随した。メンバーからの不満の声は挙がらなかったが、満足度もそれほど高くはなかった。

グループ C のリーダー: (ファシリテーター)

リーダーがうまくメンバーの意見を引き出し、アドバイスをしたことにより作業が円滑に進んだ。メンバーからの評価も高く、満足度が高かった。

講師の コメント

- ・ 多くの場合、特に災害時や紛争時のリーダーはグループ B のワンマンタイプになりがちである。しかし、強いリーダーシップを発揮するのではなく、良いファシリテーターであることが重要である。良いファシリテーターになるためには、まず一緒に事業を実施している人々と話し合い、満足度を確認する。そこで不満が出るようなら、自分の立ち振る舞いを考え直す必要がある。
- ・ 特に緊急時にはワンマンタイプになりがちであるため、定期的な人々との話し合いの場を設けることが必要である。良いファシリテーターになるためには、長時間、かつ多大なエネルギーと忍耐が必要である。
- ・ 住民と話し合いを進めるコミュニケーション能力、話し合いの前の周到な準備も必要である。ローカルリーダーを育てるためには、まずはアクティビティを通して気持ちを馴染ませることが重要である。人々の気持ちが落ち着き、気軽に話せる環境が整ったところで初めて本題に入る。そうしなければ、一方的な話し合いで終わってしまう。
- ・ 事業を開始するにあたって常に念頭に置いておくべきことは、ローカルリーダーがイニシアティブを取るということである。そのためにも、事業を開始する段階からトレーニングを受けたローカルリーダーと一緒に事業計画を作成し、その事業が外部の支援者が去った後も持続可能であることが求められる。

(鈴木晶子)

1 3) Session12: Popular Communication as Educational Tool

目的 コミュニケーションを促進する上でのツールの意義、その使い方について理解する。

プロセスと内容 1) ツールとは何か? その特徴など

- ・ ゲームなどを用いることもある
- ・ 一方通行の意思伝達ではなく、相互学習のプロセスに効果的である
- ・ ツールが用いられることによって、対象者にとって親しみやすさが増し、コミュニケーションや活動への参加が容易になる。

2) ケーススタディ : Michael Jackson の “Black or White” のビデオを鑑賞後、本ビデオを教育現場でどのようにツールとして活用するか、について 3~4 人のグループにて議論。続いて、各グループより発表を行う。

3) 2)に関するディスカッションの主な内容、コメント

- ・ 「ビデオで表現されている世界各国の多様性に触れた後、グループワークでその特徴や感想を述べ合い、自由にプレゼンテーションするのはどうか。」
- ・ 「参加者から題材となっている特定の国を選んだ上でプレゼンテーションをしてもらおう。」

講師のコメント 1) ツールを使う意義 :

- ・ 言葉だけでのコミュニケーションよりも創造的であり、容易に活用可能
- ・ コミュニケーションのあり方にバリエーションが生まれる
- ・ 幅広い年齢層に理解してもらうことが可能
- ・ Group Dynamic Activity によって、グループ内で協力しあい、相互学習が促進される

TOOLS

Creative、Variation、Related、Provoking、Challenging
Easy to use、Fun

2) ファシリテーションのあり方 :

- ・ 目的を明確にし、説明と指示を行う
- ・ フィードバック(活動に対するリアクション)を適切に行う
- ・ 現実との関連性に留意して進めた上で(processing)、まとめることが重要

FACILITATION

Objective、Instruction、Activity
Feedback (reaction to activity)
Processing (linking to reality)
Summary

(貝瀬香織)

3. 国内研修写真





JICA 東京国際センターにて (2005年10月30日)

4. 国内研修参加者名簿

	Name	Affiliation and Position	Acronym
Participants			
1	Ms. Chika Asai	Osaka YWCA	YWCA
	浅井 千賀	大阪YWCA	
2	Ms. Kyoko Arase	Japan NGO Center for International Cooperation	JANIC
	荒瀬 京子	(特活) 国際協力NGOセンター	
3	Ms. Akiko Iizuka	Citizens towards Overseas Disaster Emergency	CODE
	飯塚 明子	海外災害援助市民センター	
4	Ms. Akiko Goto	Frontline	Frontline
	後藤 明子	(特活)地球のステージ	
5	Mr. Naoyuki Koyama	Foundation for International Development/Relief	FIDR
	小山 直行	(財)国際開発救援財団	
6	Ms. Akiko Suzuki	Shanti Volunteer Association	SVA
	鈴木 晶子	(社) シャンティ国際ボランティア会	
7	Ms. Sachiko Suzuki	CARE International Japan	CARE
	鈴木 幸子	(財)ケア・インターナショナル ジャパン	
8	Mr. Taisei Suzuki	ADRA Japan	ADRA Japan
	鈴木 泰生	(特活)ADRA Japan	
9	Ms. Ai Tanaka	JEN	JEN
	田仲 愛	(特活)ジェン	
10	Ms. Yuki Tsutsumi	Japan International Volunteer Center	JVC
	提 由貴	(特活) 日本国際ボランティアセンター	
11	Ms. Ai Nishi	DEAR	DEAR
	西 あい	(特活)開発教育協会	
12	Ms. Kaori Yamaoka	World Vision Japan	WVJ
	山岡 佳織	(特活)ワールド・ビジョン・ジャパン	
13	Ms. Miwako Matsuzaki	Children Support Heart & Hand	H&H
	松崎 美和子	国際こども支援団体	
14	Mr. Nobuhiko Katayama	Japan NGO Network for Education, President	JNNE
	片山 信彦	教育協力NGOネットワーク 代表	
15	Mr. Takafumi Miyake	Japan NGO Network for Education, Secretary General	JNNE
	三宅 隆史	教育協力NGOネットワーク事務局長	
Observer			
1	Ms. Keiko Ikeda	Shizuoka University, Shaplaneer	Shaplaneer
	池田 恵子	静岡大学、シャプラニール	
2	Ms. Kaori Kaise	Japan International Cooperation Association	JICA
	貝瀬 香織	(独法)国際協力機構人間開発部基礎教育チーム	
3	Ms. Kiyomi Kawano	Ochanomizu University The center for Women's Development and Education	
	河野 貴代美	お茶の水女子大学 開発途上国女子教育協力センター	
4	Ms. Yoko Hironaka	The Japanese Red Cross College of Nursing	
	弘中 陽子	日本赤十字看護大学	
Secretariat			
	Ms. Tokiko Ito	Japan NGO Network for Education, Deputy Secretary General	JNNE
	伊藤 解子	教育協力NGOネットワーク事務局次長	
	Ms. Kyoko Yoshikawa	Japan NGO Network for Education, Intern	JNNE
	吉川 響子	教育協力NGOネットワーク インターン	
	Mr. Hiroki Nagatomo	Shanti Volunteer Association	SVA
	長友 裕輝	(社) シャンティ国際ボランティア会 海外事業・企画調査課 パート	